

献血時のシャーガス病に対する今後の安全対策についての論点  
(平成 26 年度第 1 回安全技術調査会の議論結果まとめ)

- (1) *T. Cruzi* 抗体検査の実施対象者の範囲について。  
→問診を行い、リスクのある方を対象に検査を行う。
- (2) *T. Cruzi* 抗体検査において、ウィンドウ期を考慮する必要性について。  
→帰国後一定期間を置くことが望ましく、WHO 基準に従い、6 か月とする。
- (3) 検査対象とする流行地域滞在期間を通算 6 か月とすることについて。  
→検査を行うこととする滞在期間は短く設定したほうが安全である。
- (4) 検査の陰性履歴があるケースでも、その後再度流行地域に一定期間滞在した場合の再検査の必要性について。  
→再検査を行う。一定期間とは(3)と同じ期間とする。
- (5) 導入する抗体検査の検査精度は十分であるか。  
→十分である。
- (6) *T. Cruzi* 抗体検査の検査履歴があり陰性である場合、製造制限を解除し、献血を通常通り実施することで問題ないか。  
→上記の課題が解決できた場合は、次回の調査会で再度検討する方向性が示された。それまでは製造制限と調査を継続する。

現行の安全対策	第 1 回安全技術調査における日赤案
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 問診で以下のいずれかの該当者の献血は、<b>製造制限</b>(血漿分画製剤の原料血漿のみ使用)を実施。 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 中南米出身者</li> <li>② 母親が中南米出身者</li> <li>③ 中南米に通算 <u>4 週間以上</u>の滞在</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 問診で以下のいずれかの該当者の献血は、<b>製造制限</b>(血漿分画製剤の原料血漿のみ使用)及び<b>抗体検査</b>を実施。 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 中南米に<u>6 ヶ月以上</u>の滞在</li> <li>② 母親若しくは<u>母方の祖母</u>が中南米に居住していた</li> </ul> </li> <li>● ただし、上記①②いずれかに該当する場合であっても、<u>過去の献血で陰性結果が出ている場合は、通常献血を実施。</u></li> </ul>